

〔研究ノート〕

「公民科教育法を指導するにあたって」

石 川 和 之

はじめに

- 1 豊かな心を持つ教師
- 2 健康で、元気のある教師
- 3 心のこもった学習指導・生徒指導・進路指導・部活動指導等ができる教師
- 4 正しい倫理観を持つ教師
- 5 継続的に課題を設定し、自己研鑽に努める教師

私が「求める教師像」として、言い続けていたものである。3・5について、後で述べることと関連してくるので、簡単に説明させていただく。

3については、生徒と常に真摯に対応し、生徒一人一人の成長のため、全力で取り組める教師になって欲しい。

心のこもった学習指導をするために、十分すぎるほどの教材研究、指導方法の工夫、評価の改善等が不可欠であり、学習指導を通じて「確かな学力」、そして「生きる力」を育んでいかねばならない。公民科教員を目指す人も、今から視野を広げ、探究心豊かに自身を高めてもらいたい。

5については、教師は教壇を降りる日まで「勉強」、できれば生涯勉強の姿勢を持って欲しい。研究と修養に努め、常に視野を広くして、レベルアップを図るべきである。公民科教員は、常に社会の様々な事象に目を向け、それを自分なりに理解し、分析や批評する姿勢を持ち続けてもらいたい。

公民科は、「生きる力」の育成に大きく貢献するものである。また、生徒にとって、有意義な時間にしなくてはならない。

現行学習指導要領における公民科の目標は、以下のとおりである。

広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。

一つ一つの文言が重く深い。

公民科教育の責任の重さとやりがいの大きさを感ずる。

本稿では、社会科教員として、地歴公民科教員として、高校教育に携わってきた私の教師生活を振り返るとともに、確かな学力の育成に触れ、現在大学で担当している講座の中

からいくつかの項目を取り上げる。現職の公民科教員及び教職を目指す人・公民科の教員を目指す人が本稿を読んで、少しでも参考にしてくれたら幸いである。

第1節 学習指導要領の変遷と私の歩んだ道

私の社会科教員・地歴公民科担当としての教師生活は、試行錯誤の繰り返しであったような気がする。とりわけ、5・6年目くらいまでは、今にして思えば生徒に迷惑をかけることが多かったと考える。むしろ、生徒に助けられていた部分もあったろう。その後がすべてうまくいったというわけではないが、若い頃の反省を生かして臨んでいた。

様々な部署と立場で社会科・地歴公民科に関わってきた。授業で担当した科目は、現代社会・政治経済・日本史・世界史・地理、つまり倫理以外はすべて担当した。定年退職してからは、縁があって、大学で教鞭をとらせていただき、やりがいを感じて取り組んでいる。

今思うのは、前述のとおり「生涯勉強」ということである。探究心や研究心が無くなったら、教壇を降りなければならない。

私の歩んだ道のいくつかの時代を振り返る。

1 初任校で

1978(昭和53)年4月、私は、高等学校社会科教員として千葉県に奉職した。当時は社会科の科目ごとの募集で、私は「日本史」で受験した。

当時の学習指導要領は、1970(昭和45)年版で、以下の内容であった。

倫理・社会	2単位	必修	
政治・経済	2	必修	
日本史	3	2科目必修	}
世界史	3		
地理A	3		
地理B	3		

初任校は地域の進学校で、ほとんどの生徒が大学進学希望であった。私は、「日本史」を担当した。3学年8クラスのうち2クラスが「日本史進学クラス」で、全員が共通一次試験(現在のセンター試験)か私大入試で日本史を選択していた。6単位で実施しており、授業の進行も速く、教材研究に追われる毎日であった。野球部の顧問も務めていたため、家に帰るのは毎日9時過ぎ、そこから入浴と食事をして、10時くらいから必死に準備をした記憶がある。

さらには、生徒からの添削希望攻勢。これが結構難しい。特に私立大学の問題は難易度も高く、だいぶ苦戦した。それでも翌日には、添削して解説する事を心がけた。結果として不十分なケースもあったのだろう。ある時、私が教えている生徒が、研究室の私の目の前を通り過ぎ、私の先輩の先生のところに質問に行った。あの時の悔しさは今でも忘れない。一方で、冷静に「自分はまだまだ力が無いんだ。」と分析していた。私はさらに教材研究に

励み、自分を鍛えた。この姿勢は今でも失っていない。やはり、「生涯勉強」なのである。

2 「現代社会」元年

2校目は工業高校で、担当したクラスのほとんどが男子生徒、活発でちょっとやんちゃな、人なつこい生徒が多かった。

当時の学習指導要領は、1978（昭和53）年版で以下の内容であった。

現代社会	4単位	必修
日本史	4	選択
世界史	4	
地理	4	
倫理	2	
政治・経済	2	

私は、現代社会を担当した。まさにこの科目が現場で教えられる最初の年からである。多くの社会科の教員が、教材の準備や授業の工夫に精力を注いだ。私も例外でなく、教科書とにらめっこしながら、教科書以外の教材も用意し、試行錯誤を繰り返していたと思う。一方で、初めて実施される科目ということで、ある意味自由もあり、生徒と楽しく授業を進めていた記憶がある。教師になって5年目で、この科目を担当できたことは私にとって幸いだったと考える。融合科目・総合科目である現代社会を担当するには、当時の社会科の全科目にわたる素養が必要であり、現代社会を毎年担当する中で、私自身も社会科の教員として成長させていただいたと考えている。

この学校では、この現代社会を中心に、政治経済・世界史も担当した。特に、現代社会と政治経済は重なる部分が多く、1年次で履修した現代社会の政治経済分野の振り返りを行いながら、3年次で政治経済を展開した。生徒の記憶も薄れていたため良い復習となり、就職希望者も多かったのも、社会人に必要な素養を育成する上で、良かったと考える。

3 初めての女子校で地理も担当

3校目は女子校であった。かなりの緊張感をもって赴任した。女子校独特の雰囲気があり、戸惑う部分もあったが、真面目に学校生活に取り組み、女性として成長・自立して、社会に羽ばたこうとしている生徒に感銘を受け、自分なりに、すべての教育活動を通じて支援させていただいた。

ここでも、現代社会を中心に、日本史そして初めて地理も担当した。地理を担当するに当たって教材の準備等に多くの時間を費やしたが、このことが現代社会を担当する上で大いに生かされたと感じる。

当時の学習指導要領は、1989（平成元）年版で以下の内容であった。

【地理歴史科】		
世界史 A	2 単位	} 1 科目必修
世界史 B	4	
日本史 A	2	} 1 科目必修
日本史 B	4	
地理 A	2	
地理 B	4	
【公民科】		
現代社会	4 単位	} いずれかを必修
倫理	2	
政治・経済	2	

社会科が、地理歴史科と公民科に分けられたのである。当時教育現場では、さほど混乱なく受け入れられた。何より、科目そのものが変動したわけではなかったからであろう。実際、それまでの社会科教員の多くは、自身のことを「社会科教員」と呼んでいた。

私には、特別な想いがあった。それは、自分が「公民科教員」であり、「地理歴史科教員」であるという責任、そしてさらに研究と修養を重ねなければならないという緊張感であった。格好つけるわけではないが、前向きに受け取っていたと思う。

4 『生徒が取材し、調べ、発表する授業』－4校目での研究

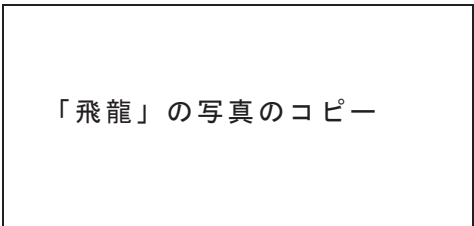
4校目は小規模な女子高校であった。純真素朴な生徒多い中、生徒たちは自主性を養い、日々の学校生活を楽しく送り、前任校同様、社会に羽ばたこうと努力していた。

当時の学習指導要領は、前出の1989（平成元）年版であった。私は、現代社会を担当する中で2年間にわたり、『生徒が取材し、調べ、発表する授業』と題して授業研究に取り組み、千葉県教育委員会の冊子に掲載させていただいた。次期学習指導要領で注目されている「アクティブラーニング」に似た取組であったかもしれない。

ここでは、発表用報告書2件及び事後アンケートの一部のみ紹介させていただく。

図1 <発表用報告書A> できる限り、原本に忠実に再現した。

主 題	祖父の戦争体験
誰からの取材か	祖父から（76才）
いつ頃の話か	1941年～1945年
参考資料	「一億人の昭和史」
取 材 内 容	<p>祖父は、10代後半に軍隊（陸軍）に入り、戦争を経験しているそうです。祖父は、四式重爆撃機「飛龍」という飛行機に乗っていたそうで中国や東南アジア方面に行き、何度も危ないめにあったと言っていました。</p> <p>そして、昭和20年8月、九州で終戦をむかえたそうですが、何人もの仲間が亡くなったと話してくれました。</p>
調 査 内 容	<p>日本陸軍 四式重爆撃機 飛龍</p> <p><太平洋戦争></p> <p>1941（昭和16）年～1945（昭和20）</p> <p>第二次世界大戦のうち、アジアでの日本と連合国との戦争をさす。</p> <p>日本政府は、国民に大東亜戦争と呼びせた。日本は既に満州事変・日中戦争と中国との戦争を続けていたが、日中戦争の長期化に伴って、米英との対立も激化。日中戦争の打開と東南アジアにおける資源獲得をめざした日本は欧州でのドイツの勝利に刺激されて南方進出を企図。北部仏印進駐などによって米英との対立は決定的となって開戦。真珠湾攻撃、マレー沖海戦などによって制海権を握った日本は、開戦半年でフィリピン・マレー半島・インドネシアなどを占領。さらにニューギニア・ガダルカナルに進出してオーストラリアに迫った。</p> <p>しかし、この頃からアメリカは反撃に転じ、ガダルカナルに上陸、日本軍は撤退。ミッドウェー海戦で敗北、日米両国の生産力の差も現れはじめ、日本は制海・制空権のほとんどを失い、補給も困難となり、戦局の主導権はアメリカの手に移った。アメリカ軍は島伝いに北上、サイパン・フィリピンなどを占領、日本本土に激しい爆撃を加え、1945（昭和20）年4月には沖縄に上陸した。5月にはドイツが無条件降伏、軍部は本土決戦を唱えたが、広島・長崎への原爆投下、ソ連対日参戦により、ついにポツダム宣言を受諾、無条件降伏して8月15日終戦詔勅を放送した。9月2日降伏文書に調印、以後サンフランシスコ講和条約発効まで日本は占領された。</p>
感 想	<p>私はおじいちゃんの話聞いて、おじいちゃんは死ぬのを覚悟で飛行機に乗っていたと思うからすごいなと思ったし、もう二度と戦争はしないでほしいと思いました。</p>



<教科担任より>

おじいちゃんの生きた歴史です。時代の波の中で命をかけて爆撃機に乗り、何度も生死の境を乗り越え生き抜きました。おじいちゃんが戦死していたら、あなたのお父さんも生まれなかったし、当然あなたもこの世にいません。亡くなった何人ものおじいちゃんの仲間のご冥福を祈るとともに、二度と戦争が起こらないようにと思うばかりです。

図2＜発表用報告書B＞ できる限り、原本に忠実に再現した。

主 題	大多喜町の水害																						
誰からの取材か	母の知り合い																						
いつ頃の話か	1 9 7 0 （昭和 4 5 ） 年 7 月 1 日																						
参考資料	新聞（当時の朝日新聞）																						
取 材 内 容	<ul style="list-style-type: none">・ バケツをひっくり返すような雨が2・3時間続いた後、田んぼと道が湖のように一体になった。・ 紙敷では、牛と豚が川に流されてしまった。・ 久保町は、床上浸水。・ 橋が壊れたり、道路はがけ崩れや木が倒れて、車が通行できない所がたくさんあった。・ 佐藤首相が視察に来た。																						
調 査 内 容	<div><div><div><被害状況></div><table><tr><td>死亡</td><td>1 5</td></tr><tr><td>負傷</td><td>1 9</td></tr><tr><td>不明</td><td>3</td></tr><tr><td>家屋全壊</td><td>8 0</td></tr><tr><td>同 半壊</td><td>1 8 1</td></tr><tr><td>床上浸水</td><td>2 2 1 6</td></tr><tr><td>床下浸水</td><td>5 5 3 5</td></tr><tr><td>道路損壊</td><td>5 0 9</td></tr><tr><td>堤防決壊</td><td>3 0</td></tr><tr><td>山崩れ</td><td>3 7 9</td></tr></table><div><div>(7月3日午後6時調べ)</div><ul style="list-style-type: none">・ 農業関係21億円損失・ 交通網は完全にマヒした・ 軒並みに臨時休校</div></div><div>被害を伝える写真のコピー</div></div>			死亡	1 5	負傷	1 9	不明	3	家屋全壊	8 0	同 半壊	1 8 1	床上浸水	2 2 1 6	床下浸水	5 5 3 5	道路損壊	5 0 9	堤防決壊	3 0	山崩れ	3 7 9
死亡	1 5																						
負傷	1 9																						
不明	3																						
家屋全壊	8 0																						
同 半壊	1 8 1																						
床上浸水	2 2 1 6																						
床下浸水	5 5 3 5																						
道路損壊	5 0 9																						
堤防決壊	3 0																						
山崩れ	3 7 9																						
感 想	私が生まれる以前に、こんな大きな水害が起きているとは思わなかった。死者を出すほどの大きな水害が、これからは起きてほしくないと思った。																						

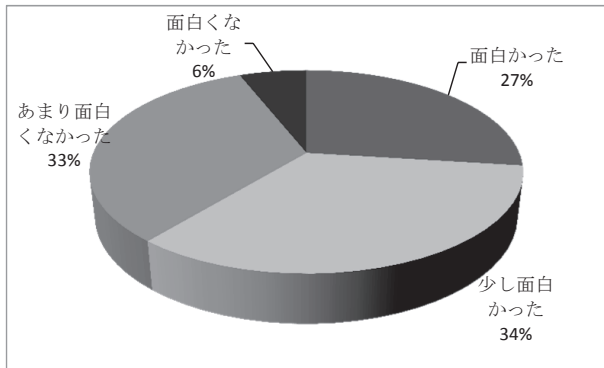
＜教科担任より＞

大多喜町の水害については、30年前とはいえ、その被害の大きさや印象深い光景から何人かの生徒が指摘してくれました。当時の佐藤首相が来町したことも大変なことです。

その後、水害に対する対策は進んでいると思いますが、いつどんなことが起こるかもしれません。普段から、いざというときに備えて、心構えや非常品の準備はした方がいいと考えます。

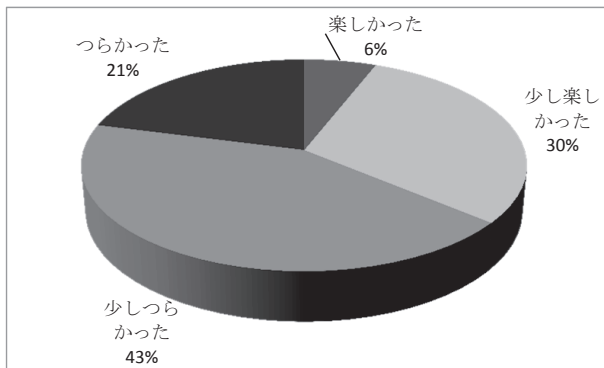
＜アンケートの一部＞ ※ 考察は抜粋

図3 取材は、どうだったですか。



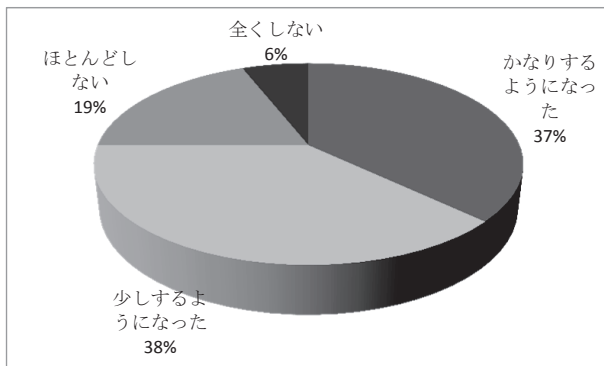
- ・61%の生徒が面白かったと回答
- ・今後はこれを機会に、色々な人に積極的に話を聞く姿勢を持ってもらいたい。

図4 発表は、どうでしたか。



- ・64%の生徒がつまらなかったと回答
- ・これから生きる若者は、大勢の前でしっかり発表できなくてはいけない。
- ・今年度の授業が少しでもきっかけになってくれれば幸いである。

図5 家族と話をするようになりましたか。



- ・75%の生徒が、頻度の差はあれするようになったと回答
- ・今回の目標の一つが家族との会話であり、そういう意味で満足している。
- ・生徒一人一人が少なからず視野を広げることができたと考える。
- ・中教審答申「もう一度家庭を見直そう」にわずかでも貢献できたのではないか。

5 「ゆとり」教育

千葉県教育委員会で指導行政に携わった。初めて現場を離れて戸惑いもあり、生活のリズムも大きく変わった。仕事内容も多岐にわたり、仕事量も膨大であった。しかし、一つ一つの仕事が新鮮で、貴重な体験は間違いなく私を成長させてくれたと思っている。

当時の学習指導要領は、1999（平成11）年版で以下の内容であった。

【地理歴史科】		
世界史 A	2 単位	} 1 科目必修
世界史 B	4	
日本史 A	2	} 1 科目必修
日本史 B	4	
地理 A	2	
地理 B	4	
【公民科】		
現代社会	4 単位	} いずれかを必修
倫理	2	
政治・経済	2	

何より、「ゆとりの中で生きる力をはぐくむ」ことが提示され、話題となった。ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。完全学校週5日制を円滑に実施し、生涯学習の考え方を進めていくため、時間的にも精神的にもゆとりのある教育活動が展開される中で、子どもたちが基礎・基本をじっくり学習できるようにするとともに、興味・関心に応じた学習に主体的に取り組むことなどが打ち出された。

「ゆとり教育」についての評価は、意見が分かれるが、現在では確実に「反ゆとり」への流れがある。実際に高校現場では、極端には意識されず、各教科・科目で教授内容や授業方法が創意工夫されて、授業が展開されていたのではないか。地歴公民科では、前学習指導要領と単位数や必修科目も変わらず、大きな混乱はなかったと記憶している。

大きな変化としては、土曜日が休みになったことであろう。結果的に生徒や教師にとって、週休日としての土曜日が「ゆとり」になっていたか。

（1）小・中学校の授業から学ぶ

教育委員会では、立場上、小・中学校の授業も多く見させていただいた。周到的準備と綿密な学習指導案、何より熱意のある授業展開、高校現場しか経験のなかった私には、逆に学ぶことの方が多かったことも事実である。生徒を巧みに動かし、丁寧な授業展開、生徒との豊かな人間関係に根ざしたキャッチボール、さらには教室内外の掲示物の工夫、新鮮であり、多くの高校教師に見てもらいたいと感じた。

それまで高校では、授業公開があまり行われず、先生方の中にも授業を見られることについてアレルギーがあった。しかし、義務教育では、毎年必ず指導行政の職員の訪問があり、学校を挙げて対応していた。

また、職員同士の校内研究も盛んに行われていた。そのことが、学校の姿勢を示す大きな機会となり、学校の活性化につながっていた。先生方も自己研鑽を重ね、成長していたと考える。

その後、千葉県をはじめ、多くの都道府県教育委員会で指導行政による高等学校訪問が実施され、高等学校における公開授業研究がごく普通に行われるようになった。今では、高校の先生方もむしろ授業を多くの人に見てもらい、自身の授業改善に役立てている現状もある。

(2) 総務省自治行政局選挙課－国立国会図書館

選挙制度に関する資料を作成することになった。1890(明治23)年の第1回衆議院総選挙から1946(昭和21)年の第22回衆議院議員総選挙まで、選挙人の数と全人口比の推移を選挙法改正ごとにグラフにするものであった。

安易に考えていた私は、高校教科書や副教材及びネットから数値を拾い、比較的短時間でグラフにして自信満々で上司に提出した。しかし、そこで上司からの言葉は、「根拠となる資料を明示せよ。」であった。想定外の言葉に困惑した。考えてみれば、資料はないのだ。すべて出来上がったものを勝手に活用しただけなのであった。しかも教材によって、数値が微妙に違うのである。「きちんとした資料の裏付けがなければ、県教育委員会の資料としては出せない。」と追い打ちをかけられた。

そこで、指示されたのは根拠となる数値を正式な機関から入手し、それを基にグラフを作成するというものであった。私は色々調べ、まずは総務省自治行政局選挙課に問い合わせた。選挙課は大変親切で、様々なアドバイスとともに、国立国会図書館に行けば過去のデータが入手できると教えてくれた。私は国立国会図書館におもむき、無事資料を入手し、それを基に何とか指示された資料を完成させ、当該資料を添付して上司に提出し、受理された。

公民科では、様々な資料を活用して授業を展開することが多い。実際は、副教材等を利用してしまふことが多いが、一つ一つの資料についてきちんとした裏付けを持ち、それ以前にきちんとした裏付けのない資料は生徒に提示しないくらいの気概が必要であろう。私にとって良い教訓となったし、そのことを教えてくれたあの時の上司に感謝したい。

最近では、ネットで様々な情報が得られる。教師はその情報を鵜呑みにせず、自ら資料づくりに励んでほしい。

(3) 対馬藩の江戸時代の領地

これも私の未熟さゆえの失敗談である。江戸時代の対馬藩領地を北部九州を含めた地図で示すように指示された。御存知のように、対馬藩は江戸時代に朝鮮との重要な外交窓口として大きな役割を果たし、幕府からも特別な扱いを受けていた。

私は、対馬藩(対馬府中藩)といえは領地は対馬のみと決めつけ、早速作成して、提出した。しかしである。上司は、私に一冊の本を渡し、読むように指示した。本のタイトルは忘れたが、そこには、対馬府中藩の領地が対馬だけでなく、肥前国(現在の佐賀県)の一部に飛領があることが書かれていた。あのまま公開していたら、千葉県教育委員会は間違ったというか、不十分な資料を出していたことになる。

6 高等学校の管理職として

教育委員会で指導行政に携わった後、私は高等学校の管理職を10年以上務めた。教頭そして校長として学校経営に携わる中で、授業の評価が学校の評価に直接つながることを痛感した。地歴公民科に対する探究心を失わないように心がけるとともに、すべての教科について自分なりに勉強し、授業観察をさせていただき、大いに意見交換し、助言もした。

学習指導要領は、前出の1999(平成11)年版から、下の2009(平成21)年版に移行していった。

【地理歴史科】		
世界史A	2単位	} 1科目必修
世界史B	4	
日本史A	2	} 1科目必修
日本史B	4	
地理A	2	
地理B	4	
【公民科】		
現代社会	2単位	} いずれかを必修
倫理	2	
政治・経済	2	

2017年3月に、幼稚園、小学校、中学校の新しい学習指導要領が公示された。高等学校についても、2017年度中に公示される予定である。しかしながら、あと数年は上記の学習指導要領が現行となる。

(1) 授業が80%

教師の仕事の中で、授業が占める割合はどのくらいなのか。この頃から、そして今もよく質問される。私の答えは「80%」である。授業そのものと準備、併せると十分「80%」なのである。

現場で管理職をしている時、先生方にこう話し、常に授業改善と自己研鑽を求めた。現在大学で講義をする中でも、学生に説いている。当時も今も、微かな反応がはじめは返ってくる。

確かに教師の仕事は、膨大で多岐にわたる。授業とその準備以外にも、やるべきことが山積している。朝と帰りのSHR、LHRや総合的な学習の時間の計画と実施、学校行事、生徒会活動、道徳の時間、学年全体の仕事、分掌としての教務・生徒指導・進路指導等のいずれかの業務、委員会顧問、さらには生徒との面接、保護者対応、そして部活動。まだまだある。

それでも私の答えは変わらず「80%」。その理由は、

- ① 教師はまず授業で勝負しなければならない。自身の専門性を生かした魅力ある、生徒にとって分かりやすい授業を展開してこそ、評価されるべきである。
- ② 経験上、授業がうまくいっていない教師は、何をやっても成果をあげられていない。クラス経営・特別活動・総合的な学習の時間、そして部活動の指導等で成果をあげている教師は、授業でも生徒から支持されている。従って、「部活動の指導がしたくて教

師をめざした」は私としては認められない。まずは、授業ありきである。

- ③ 「何の先生ですか？」と聞かれて「〇〇部の先生です」とか「教育相談が専門です」とか「教務主任です」などと答える先生はまずいない。答えはやはり「地歴公民科です」、「政治経済です」、「倫理です」、「現代社会です」などであろう。
- ④ 授業が充実かつ順調に展開されるようになると、教師は少しずつではあるが、自信が持てるようになる。そのことが、クラス経営をはじめ様々な教育活動に波及していく。

私は今でも若い教員や学生にこう言う。「まず、授業だよ」

(2) 良い授業とは

ある意味、教師が教師生活を通じて追い求めるものである。

私の答えは、

- ア 生徒の動きが見られて
イ 生徒が達成感を感じて(わかる授業)
ウ 学問の香りがする

この3点で、先生方にも話をしていたし、依頼された講演の中でも述べさせていただいた。様々な観点から多く考えが出されていると思うが、私はこの視点を貫いてきた。以下、ア～ウの3点を簡単に説明したい。

ア 「生徒の動きが見られて」

生徒が受け身ばかりの授業は、避けなければならない。教師が50分間、講義形式で行ういわゆる一斉学習の形態は、学習指導要領の流れにも逆行している。授業の中で、生徒が頭と体を動かす場面を設定してあげたい。そのためにも教師一人一人が授業方法を研究し、講義・問答・討議・作業・調査報告・観察見学等を適切かつ効果的に取り入れていかねばならない。

ただし、講義中心の一斉学習を否定するものではない。生徒全員が、一つの学習内容を同時に学習でき、多くの知識を吸収できる機会となり、今まで果たしてきた役割は大きい。内容に照らして、いかに効果的に様々な形態を取り入れていくか、上手に併用していくか、教師の腕の見せ所である。

イ 「生徒が達成感を感じて(わかる授業)」

生徒に学習意欲を喚起することは重要である。以前、千葉県内の教育事務所から、下記のような資料が出されていたので一部を引用したい。

「ハートのある授業づくりを目指す。
あなたの授業では、こんな言葉が聞こえてきますか？」



そうか。わかった！
できた！
よし、次の問題もやってみよう！
もっと上手になりたい
今日の授業は楽しかった
次の授業が楽しみだ！
考えたことを発表したい

私の思いを適切に表現してくれている。生徒が達成感を感じるわかる授業、生易しいことではない。授業時間の何倍もの準備が必要である。

しかし苦労の結果、生徒が少しでも達成感を感じてくれたら、教師としてこれほどの喜びがあるだろうか。そして現状に満足せず、さらに授業を極めていくことが、教師に課せられた使命である。

ウ 「学問の香りがする」

大学を出て高等学校に奉職する際、お世話になった先生からこう言われた。「高校の先生になるのなら、在職中に研究論文をいくつか書きなさい。」別に高校の先生に限ったことではないと思うが、そのくらい専門分野を勉強せよということであろう。私は忙しさにまかして、初めて書いたのが40歳を過ぎてからで、結局恩師に見せずじまいである。

若手の頃、先輩教師に恵まれ、鍛えていただいた。分厚い専門書を何冊も積まれ、「当然、これは読んでいるよね。」授業を見ていただいて、「生徒からこういう質問が出たら、対応は準備していたよね。」生徒の発表形式で授業を実施したとき、「当然、すべての発表について裏付けの調査と研究をしているよね。」大学で少しは勉強してきたと勝手に思い込んでいた私には、衝撃の連続であった。しかし、めげずに頑張ったことで、力をつけることができたと考える。

授業のそこかしこに、生徒の興味を引く、生徒をうならせるような内容を織り込めたら、生徒も楽しいだろうし、教師も同様ではないか。経験上、生徒の学力に関係なく、魅力があり、学問の香りがする授業には、生徒は目を輝かせて食いついてくる。

(3) 授業観察に全力

管理職を務める中で、授業観察を大いにさせていただいた。制度上、管理職の授業観察は義務づけられている。私は先生方の授業観察をすることで、自分自身の勉強になり視野も広がると確信し、忙しい合間をぬって授業観察を行った。

50分間の授業すべてを観察し、メモもしっかり取り、後で必ず担当の先生と大いに意見交換し、指導助言も行った。地歴公民科の教員の私にとって、他教科の授業を50分間見られることは、有意義であった。そして、前出の私なりの良い授業の条件について、意を強くした。間違いなく、すべての教科に通用した。

7 そして今、大学の教員として

御縁があり、現在は大学で教職をめざす学生たちの指導をさせていただいている。具体的には、公民科関連、特別活動論、さらには集中的に人権教育・学校経営に係る学生の発表のサポートをしている。

詳しくは、第3節で述べることにしたい。私の今までの経験を生かして一人でも多くの学生を教壇に立たすことをめざして、やりがいを感じながら取り組んでいる。

第2節 確かな学力の育成と公民科教育

「確かな学力」とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものである。

確かな学力の育成、そして学力の向上への取組は、教育が国民からの信頼を得るためにも重要である。確かな学力は、豊かな人間性、健康と体力と併せて、「生きる力」の一つの柱となっている。

各学校は、以下のとおり、確かな学力の育成に取り組んでいかなければならない。

1 確かな学力の育成を学校教育目標の重要な柱とし、校内外に明確に示す。

校長をはじめ、全職員の共通理解の下、校内体制を確立させる。また、保護者・地域社会にも説明することで、連携・協力をいただく。

公民科教員も、教えることに誇りに感じながら、研鑽を重ね、創意工夫を図り効果的な授業を展開し、確かな学力の育成の一端を担わなければならない。

2 魅力ある教育課程を編成する。

教育課程とは、学習指導要領を踏まえ、学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を児童生徒の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画である。

各学校には、教育課程検討委員会なるものが存在する。ここでは、教頭や教務主任が中心となり、各教科の代表が意見を持ち寄り、その学校の実情に応じた教育課程の原案を作成する。より効果的に確かな学力を育成できるよう、すべての教師が生徒のことを考え、積極的に意見を出さねばならない。

公民科についても、どの科目を、何単位で実施するか、何年生で実施するかなどをしっかり科内で議論しなくてはならない。

今後は、2017（平成29）年度中に公示予定の「高等学校新学習指導要領」でも取り上げられるであろう「社会に開かれた教育課程」も念頭に置かななくてはならない。社会とのつな

がりを重視しながら学校の特色づくりに取り組み、生徒が社会の変化に柔軟に対応できるような教育課程が求められる。

3 教師の指導力向上を図る。

生徒にとって教師は大きな教育環境である。教師が力量を高めることにより、確かな学力の育成が円滑に進められる。研修等を通じて、国や県の施策の周知し、様々なスキルの向上を図り、授業内容や指導方法について教師全体で大いに研究協議し、研修を深める。

また、教師同士が教科内や教科の枠を超えて互いに授業観察を行い、意見交換をしながら、よりよい授業の展開に向けて切磋琢磨することが重要である。

公民科教員は、他教科よりもいっそう広い視野を持ち、幅広い教養を身につけ、考察力・思考力・分析力等を研ぎ澄まし、自らを高めていかなばならない。

4 行動連携を推進する。

学校・家庭・地域社会・関係機関が一体となって、生徒に確かな学力を育んでいかなばならない。学校外の教育力を積極的に活用していく。そのためには、開かれた学校づくりが不可欠である。日ごろから説明責任を果たし、分かりやすいシラバスの作成、授業公開等に取り組んでいかなばならない。

公民科教育についても、担当教師が丸抱えして行うのではなく、学校外の教育力を大いに活用すべきである。創意工夫すれば、行動連携を図れる場が数多く存在している。例えば、特定のテーマについて外部講師の招聘、学習活動の形態である「調査・報告」や「観察・見学」における学校外の人材・施設の活用等が考えられる。特に公民科の場合、学習機会、学習素材は、社会の至る所に存在している。

生徒が学校外の教育力に触れることで、学んだことを実際に立証したり、社会と接する気概を育成したりすることが期待できる。このような活動が、「アクティブラーニング」につながっていくと考える。

5 発達段階に応じた「キャリア教育」を進める。

キャリア教育は、生きる力の育成に欠かせない。当然、確かな学力の育成にも大きな役割を果たす。一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることをとおして、キャリア発達を促していかなばならない。キャリア教育による学習意欲の向上・学習習慣の確立が期待され、すべての教育活動を通じたキャリア教育の推進が求められている。

公民科は、高等学校のキャリア教育において、重要な役割を果たさなければならない。現行学習指導要領における公民科の目標にちりばめられている「広い視野」、「現代の社会について主体的に考察・理解」、「人間としての在り方生き方についての自覚」、「平和で民主的な国家・社会の有為な形成者」等のキーワードは、キャリア教育と深く関わる。公民科教育を通じて、一人一人のキャリア発達を支援していくことが肝要である。そして、公民科教員は、自らの見識を生かして、キャリアカウンセリングにも積極的に貢献していくことが求められる。

変化が激しく、先行き不透明なこの時代、一人一人の生徒にしっかりした「生きる力」、そして「確かな学力」の育成が、今まで以上に求められている。公民科教育が、大きな原動力となっていくことは、間違いない。公民科教員は、このことを踏まえ、今まで以上に創意工夫して、研究と修養を重ね、プライドを持って、授業等に臨んでもらいたい。

公民科教員をめざす皆さん、とてもやりがいのある教科なのである。今から自らを高め、やがて教壇に立って、生徒を育んでいただきたい。

第3節 そして今、公民科教員を育てる

現在大学の講師として、公民科教員を目指す学生相手に教鞭をとっている。

高等学校教育現場に勤務してきた者として、出来るだけ学生に公民科教育の現状等を伝え、より実践的な研究と生徒を効果的に育成できるような技術や心構え等を伝えようと努めている。

文部科学省においても、「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」が開催され、教職課程全体の質保証が検討されている。

「各事項に係るコアカリキュラム(案)」の「各教科の指導法」では、全体目標として、『当該教科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された当該教科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深め、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。』が提示されている。

さらに一般目標として、

『学習指導要領に示された当該教科の目標や内容を理解する。』

『基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。』

の2点が提示され、付随する到達目標も各5点が示されている。

教員養成段階で、教育現場における公民科教育の現況をまず把握させる。そして、公民科教育の目標・内容を理解し、実践的な指導に係るスキルを身に付けさせる講義・実習等が不可欠であり、教職課程の指導者も常に創意工夫を図りながら、講義に臨むべきであろう。

ここでは、2017年度の講義概要と2015～2017年度における講義のいくつかのポイントを紹介したい。拙い内容であるが、私の取組の一端をご理解いただき、少しでも参考にいただければ幸いである。

1 講義内容(2017年度)

(1) 公民科教育法(1)

ア 高等学校学習指導要領(公民科各科目)の理解を深める。

イ「現代社会」を中心に、「公民科」の効果的な授業展開と指導方法を探究する。

ウ 高校教育における公民科の役割と公民科教員としての在り方を考察する。

エ 公民科の学習指導案を作成する。

(2) 公民科教育法(2)

- ア 高等学校学習指導要領(公民科各科目)の理解を深める。
- イ 公民科各分野についての効果的な授業展開と指導方法を探究する。
- ウ 公民科各科目における評価の方法について考察する。
- エ 公民科の学習指導案を作成する。

(3) 公民科教育実践

受講生による複数回の模擬授業(自ら作成した学習指導案を使用した授業を含む)を行い、実際に教壇に立ったときに必要となる授業感覚と指導技術を養う。

2 授業計画(簡略版)

(1) 公民科教育法(1)

- ア オリエンテーション 教職とは 授業とは 1時間
- イ 学習指導要領 公民科の歴史 教育課程 1時間
- ウ 学習指導 形態 指導計画 シラバス 1時間
- エ 公民科教育の基本的性格 公民科 現代社会 1時間
- オ 公民科教育の基本的性格 政治経済・倫理 1時間
- カ 公民科学習指導案の作成 1時間
- キ 公民科各科目の指導内容と指導方法 6時間
2017(平成29年度)「地球環境問題」「資源・エネルギー問題」
「情報化の進展と生活」「現代社会の特質」「地方自治のしくみ」
「人生の中の青年期」
- ク 受講生による授業演習およびまとめ 3時間

(2) 公民科教育法(2)

- ア オリエンテーション 公民科教員としての心構え 1時間
- イ 公民科学習指導案の作成 1時間
- ウ 公民科各科目の指導内容と指導方法 7時間
2017(平成29年度)「現代の企業」「日本国憲法」
「日本の伝統思想の考え方」「社会保障の役割」「グローバル化の進展」「人口・資源・食料問題」「日本の政治機構」
- エ 教育現場における授業観察および総括 2時間
- オ 受講生による授業演習およびまとめ 4時間

(3) 公民科教育実践

- ア オリエンテーション 模擬授業で留意すること 1時間
- イ 効果的な教科書の活用 1時間
- ウ 模擬授業への準備・教材研究等 4時間
- エ 模擬授業 8時間
現代社会 4時間 政治経済 2時間 倫理 2時間
- オ 模擬授業のまとめ 1時間
模擬授業の総括と今後の課題(話し合い)

3 指導内容と指導方法の一例 ～現代社会」の「地球環境問題」～

教壇に立ち、授業をすることを想定して、講義を行う。学生には、この講義を経て、実際に模擬授業を実施してもらう。

(1) 学習指導過程の確認(この段階で履修済み)

「導入 — 展開 — 整理」が一般的である。以下、簡略に整理する。

ア 導入

まずは、学習環境を整える。教室の整理・雰囲気の整理・授業規律・出欠確認・生徒の様子確認・生徒とのキャッチボール等が考えられる。

次に授業への意欲を喚起するために、関連トピックスや有効な資料の提示を行う。そして、学習目標を明確にする。これは導入時において最も重要である。併せて、本時の流れを示す。

イ 展開

学習活動の中心であり、学習目標達成をめざして、各種の学習活動を行う。教師の腕の見せ所である。生徒一人一人の動きが見られて、達成感を感じられるよう創意工夫する。

ウ 整理

学習内容を確認し定着を図るとともに、応用・発展を促す。次時の学習の予告も大切である。

(2) 学習のねらい

教師は確実に把握し、これを踏まえた授業内容・授業展開を図らなければならない。私は、以下の3点を学習のねらいに設定した。

ア 地球環境問題が国境をこえた地球的な課題であり、しかも世代をこえた問題であることを理解させる。

イ 地球環境問題の解決のためには、国際的な協力が必要であることを認識させ、自分たちの生活を問い直すことが必要であることを理解させる。

ウ 地球環境問題に関する調査活動を通じて、適切な資料の選択と活用、表現に関する技能を高める。

(3) 板書例と留意事項

板書例	留意事項
地球環境問題	
<p>1 どのような問題が起きているか</p> <p>(1) 大気環境 地球温暖化・オゾン層の破壊・酸性雨</p> <p>(2) 陸上生態系 森林の減少・砂漠化</p> <p>(3) 生物種の減少</p> <p>2 国境を越えた問題 各国が協調して取り組む人類共通の課題</p> <p>3 国連人間環境会議 1972</p> <p>(1) スウェーデン スtockホルム</p> <p>(2) 「かけがえのない地球」 Only One Earth 地球しかない。</p> <p>4 国連環境開発会議(地球サミット) 1992</p> <p>(1) ブラジル リオデジャネイロ</p> <p>(2) 持続可能な開発 将来の世代に向けて 現在の世代の欲求も満たす</p> <p>(3) 自国の活動が他国の環境を汚染しない リオ宣言</p>	<p>○ 生徒への発問</p> <p>○ 想定した回答以外も的確に拾ってあげること。そして、想定事項に結びつけていく。</p> <p>○ 最近の新聞記事等を準備</p> <p>○ 「かけがえのない地球」の意味を考えさせる。</p> <p>○ 本当に地球しかないのか、太陽系の惑星はどうか、太陽系以外の惑星に行くことができるのか、現実的に考えさせる。</p> <p>○ 持続可能な開発の意味を考えさせる。</p> <p>○ リオ宣言の概要把握</p> <p>○ パリ協定 2015 の現状にも触れる。</p>

4 学習指導案

学習指導案は、授業を構想する際の設計図であり、進行表である。作成することにより、授業はより充実し、生徒の確かな学力に寄与すると考える。

また、記録としても残り、その時の授業の様子や改善点を浮き彫りにすることにより、授業研究にも役立つ。

以前は、高等教育現場において学習指導案を作成することは、初任等の研修以外にはほとんどなかったと記憶している。しかし最近では、授業公開の活発化・教育委員会の学校訪問等により、継続的に作成されているのが現状である。

(1) 記載すべき内容(略案の場合)

学習指導案の形式については、特に定めはない。共通して入れる必要事項を的確に盛り込めばよい。

ア タイトル ○○科 学習指導案 学校名 指導者名

イ 日時

ウ 対象クラス 生徒観

エ 場所

オ 単元名・教材名

単元：まとまった一連の学習内容及び学習経験

カ 単元観 学習課題が、明確になるように

キ 単元目標 指導すべき目標

ク 単元評価規準

現行学習指導要領では、＜関心・意欲・態度＞、＜思考・判断＞、＜資料活用の技能・表現＞、＜知識・理解＞の4観点

ケ 単元の指導計画

・何時間かけて指導するか。 ・本時の位置

コ 本時の目標

この時間で、どのような力をどのような学習をとおして、身につけさせるのか。

サ 本時の展開

本時の目標を達成するための授業展開計画

① 過程

導入 ○○分 展開 ○○分 まとめ ○○分

② 学習内容・学習活動

③ 指導上の留意点及び評価

※ 「百聞は一見にしかず」、学習指導案の一例をあげたい。

公民科（現代社会）学習指導案 <例>

〇〇〇〇立〇〇〇〇高等学校

指導者 〇〇 〇〇

1 日 時 平成〇〇年〇月〇日 〇曜日 第〇限 〇：〇～〇：〇

2 対 象 第〇学年〇組 〇〇名

3 生徒観 本クラスの生徒は、現代社会の学習に興味を持っている者が多く、学習態度は落ち着いている。

しかし、熟考せずに発言し、深く考察することが苦手な生徒も少なからず存在している。

また、環境問題解決を深く意識し、主体的に参加することの重要性を理解していない生徒も多い。

4 場 所 第〇学年〇組教室 地歴公民科講義室 等

5 単元名 「地球環境問題」

6 教材名 教科書：高等学校現代社会 〇〇出版社

副教材：高等学校現代社会資料 〇〇出版社

7 単元について

人間の様々な活動が、自然環境への負荷を増大させ、地球環境の汚染や破壊が深刻な問題となっている。地球環境問題は、現代はもちろん、将来の世代にも大きな影響をもたらすものである。今こそ成長と環境の保全の調和について考え、国際的な取組とともに、身近な生活の視点からも環境保全に取り組まねばならない。

8 単元目標

地球環境問題の背景と概要を理解し、国際的な取組の現状と課題をおさえる。

9 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
地球環境問題の背景や影響を深く知ろうとし、自身の問題として捉えようとしている。	地球環境問題にかか る課題を見だし、多面的・多角的に考察する。 問題解決に向けて主体的に考え、公正に判断している。	様々な資料を参照し、地球環境問題の特徴や今後の動向を読み取っている。追求し考察した過程や結果を様々な方法で適切に表現している。	地球環境問題の現状と国際的な取組を理解し、課題解決に資する様々な知識を身に付けている。

10 単元指導計画（3時間扱い）

（1）地球環境問題の背景と地球温暖化（本時）

（2）オゾン層の破壊・森林の減少と砂漠化・酸性雨

（3）生物多様性の危機と国際的な取組、身近な生活の視点

11 本時の目標

環境問題は地球的規模で捉え、国際的に対応すべき問題であることに気づくことができる。（思考・判断）

また、地球温暖化のメカニズムと対応策を理解することができる。

（知識・理解）

12 本時の展開

過程	学習内容と活動	指導上の留意点及び評価(○留意点◎評価)
導入 5分	(発問) 最近、環境問題で気になることはあるか。マスメディアで、何か気になる報道があったか。	○ 環境問題が深刻であり、地球的規模の問題となっている事を説明する。
展開 40分	<p>1 地球環境問題</p> <p>(1) 球環境問題</p> <p>ア 大気汚染・地球温暖化 オゾン層の破壊・酸性雨</p> <p>イ 陸上生態系・森林の減少 砂漠化</p> <p>ウ 生物種の減少</p> <p>※ 身近な問題、グローバルな問題かを問わず、環境問題の今を考え、発表する。</p> <p>(2) 人類共通の課題 地球規模</p> <p>※ 教科書や副教材の資料を見て、環境問題の切実さを読み取る。</p> <p>(3) 地球環境問題の背景</p> <p>ア 産業革命以来の工業化 20世紀に急速に拡大</p> <p>イ 化石燃料の大量消費 化学物質の利用増大 廃棄物の増加</p> <p>2 地球温暖化</p> <p>(1) 原因 温室効果ガス</p> <p>※ 地球温暖化の原因を科学的に理解する。</p> <p>(2) 影響 海面上昇 植生 農業 健康 異常気象</p> <p>(3) 国際的取組と課題 気候変動枠組み条約 京都議定書</p> <p>※ 京都メカニズムの内容及び課題を理解する。</p>	<p>◎ 人類の一員である自らの問題としても、捉えることができたか。 (関心・意欲・態度)</p> <p>○ 聞いたことがあるか、内容を知っているか問う。 項目として簡単な説明にとどめる。</p> <p>○ 地球環境問題が国境を越えた問題である点に気づかせ、そこから国際的に対応すべき課題であることを理解させる。</p> <p>◎ 資料(教科書図版)等を見て、実態の一部を読み取ることができたか。(資料活用)</p> <p>○ 持続可能な開発の考え方が重要であることに気づかせる。</p> <p>◎ 地球環境問題の背景を理解し、国際的取組の必要性を認識できたか。(知識・理解)</p> <p>◎ 自身の身近な生活の在り方を振り返り、意見を発表することができたか。 (思考・判断・表現)</p> <p>○ 地球温暖化の原因が、化石燃料の使用などの工業化にあることを理解させる。</p> <p>◎ 地球温暖化に関心を持ち、原因・影響を理解し、対応策を考えることができたか。 (関心・意欲・態度)(知識・理解) (思考・判断)</p> <p>○ 各国・各企業の利害関係もあり、多くの課題を抱えていること、しかし、やらねばならないことも認識させる。</p>
まとめ 5分	<p>1 本時のまとめをする。</p> <p>2 次時の学習を予告する。 オゾン層の破壊・酸性雨 森林の減少と砂漠化</p>	○ 本時の学習を振り返り、人間の活動と自然との調和の重要性を確認させる。

5 授業観察

公民科教育法(2)で、近隣の公立高校において授業観察を実施している。目的は、「実際に高校現場の公民科授業を観察することにより、これまでの講義の内容を確認する。また、現場の教員の実践的な指導法を学ぶとともに臨場感を味わい、教育実習に向けて心構えをあらたにさせる。」である。

(1) 感想等(共通意見のみ提示)

- ・さらに勉学に励みたい。豊富な知識と経験が必要
- ・教育自習を控え、教育の現場を見ることができて思いもあらたに

(2) 私の雑感

ア 何より、教育現場の雰囲気を教師の卵として味わったのが大きい。何年か前は、高校生であった学生が、教育実習に行くことを意識して授業観察をしてくれた。教員養成段階、特に教育実習に行く前に、状況の異なる複数の学校で授業観察をすることは意義がある。

イ 知識の深さ・広さ、技術的なことも含めて、自分自身の力不足を感じたと思う。すべては、ここから始まるので良かったと考える。

ウ 「主体になるのは自分ではなく、生徒だと思い知らされた。」という感想があった。この気持ちを今後ずっと持ち続けて欲しい。

6 公民科教員に求められる資質

求められる教師像は、「はじめに」で述べさせていただいた。当然、公民科教員にも同様の資質を求めたい。さらに以下の資質を教員養成段階から着実に育み、奉職後も自らの姿勢として伸ばして欲しい。

(1) 幅広い教養

公民科各科目はもちろん、地歴科各科目についても深い造詣を求めたい。実際に授業をすると、どうしても歴史分野・地理分野の知識が不可欠となる。幅広く大変だが、「研究と修養」に努めるしかない。地歴公民科以外についても、必要と思われるものは、貪欲に吸収して欲しい。

(2) 洞察力

物事を深く鋭く観察する能力である。様々な事象を深く読み取り、観察し、自分なりに分析・評価して、最終的に授業に生かしていかなければならない。

(3) 批判精神

批判精神がなければ、授業は通り一遍のものになってしまう。しかしあくまでも健全で公平性のある批判精神が求められる。

(4) 思考力・判断力

生徒に育む重要な観点である。社会の多くの事象を扱う公民科教員には、当然求められる資質である。授業内容等について課題を見だし、多面的・多角的に考察するのはもちろんのこと、課題解決に向けて公正・公平に判断していかなければならない。

(5) 行動力

特に、教材研究にかかる行動力である。少しでも疑問に思ったり、情報や知識不足を感じたりしたら、躊躇なく様々な書籍やネット上の情報(取捨選択に留意)、あるいは自

分の足を使って、情報収集に臨んで欲しい。それが授業に幅を持たせ、生徒の達成感アップにもつながり、学問の香りがする授業の展開に結びつく。

(6) 表現力・ユーモア

「わかる授業」をめざして、授業内容等を創意工夫し、様々な資料を駆使して、生徒に対して適切にパフォーマンス（表現）する。時にはユーモアを交えて、生徒の興味関心を喚起することが大切である。

第4節 新学習指導要領に向けて

2017（平成29）年3月に、幼稚園、小学校、中学校の新しい学習指導要領が公示された。高等学校についても、2017年度中に公示される予定である。実施スケジュールは、小学校（平成32年度～全面実施）、中学校（平成33年度～全面実施）、高等学校（平成34年度～年次進行で実施）である。

これに先立ち、2016年12月に、中央教育審議会から『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』が発表された。ここでは、公民科に係る部分の一部を取り上げ、考えを述べたい。

1 公民科の科目構成～「公共」の設置～

共通必修科目として「公共」が設置され、選択履修科目として「倫理」及び「政治・経済」が残る。そして、現行の選択必修科目「現代社会」が科目としては消えることとなる。

2 公民科の在り方

現在、多くの公民科教員が意欲的に、そして真摯に取り組んでいることを前進させていくことが、肝要である。

「社会的な見方・考え方」については、今までも公民科教育において育まれてきたと考えるが、今回の改定でより明確になる。社会的事象等に関心を持ち、課題を把握し、解決に向けて構想する際の視点や方法を生徒一人一人が身に付けて行かねばならない。

今回の改訂では、知識の理解の質を高め、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等が「知識及び技能」・「思考力、判断力、表現力等」・「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で再整理される。

「公民科」について、この3つの観点から育成を目指す資質・能力が以下のとおり、中教審答申に示されている。

表1 育成を目指す資質・能力

中教審答申2016.12別添3-2より

	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
公民科	<ul style="list-style-type: none"> ○諸課題を捉え考察し、国家及び社会の形成者として必要な選択・判断の手掛かりとなる概念や理論の理解 ○倫理的主体、政治的主体、経済的主体、法的主体、様々な情報の発信・受信主体、持続可能な社会づくりの主体に関する理解 ○社会的事象等について効果的に調べとめる技能 	<ul style="list-style-type: none"> ○諸課題について、事実を基に概念等を活用して多面的・多角的に考察したり、公正に判断したりする力 ○合意形成や社会参画を視野に入れながら、社会的事象や課題について構想したことを、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして論拠を基に議論する力 	<ul style="list-style-type: none"> ○人間と社会の在り方に関わる事象や課題について主体的に調べ分かつて課題を意欲的に追究する態度 ○よりよい社会の実現のために現実社会の諸課題を見出し、その解決に向けて他者と協働して意欲的に考察・構想し、論拠を基に説明・議論することを通して、社会に参画しようとする態度 ○多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される、人間としての在り方生き方についての自覚、自国を愛しその平和と繁栄を図ることや、各国が相互に主権を尊重し各国民が協力し合うことの大切さについての自覚等

(1) 公民科全体について

生きる力の一つの柱である「確かな学力」をより具体化し、アクティブラーニングにつながる資質・能力を育成しようとしている。

公民科で育成を目指す資質・能力の中に、「確かな学力」を鮮明にする文言が随所に示されている。

ア 「主体」という言葉で、基本的内容を理解する資質・能力
イ 発表・議論等に向けて、調べとめる資質・能力
ウ 多面的・多角的な考察と公正な判断、構想したことを論拠を基に議論する資質・能力
エ 課題を意欲的に追求し、説明・議論することを通して社会に参画しようとする資質・能力
オ 現行学習指導要領と変わらず「人間としての在り方生き方」についての自覚に係る資質・能力
カ グローバル化を意識し、自国への愛とともに各国民が互いに尊重・協力し合うことへの自覚に係る資質・能力等

(2) 公共に向けて

「現代社会」をより発展させ、生徒が主体で、生徒の動きが見られる授業を目指していかなばならない。公民科の一科目であり、育むべき資質・能力は公民科全体のものと重なる。共通必修教科科目であり、ある意味公民科を代表するものとなる。来たるべき「公共」のスタートに向けて、公民科教員及び現在公民科教員をめざしている人が、周到的準備をして、総合力を身に付け、生徒にとって有意義な科目として、長く役割を果たすことを望みたい

第1節で述べたとおり、「現代社会」元年から担当してきた者として、感慨深い。あらためて、私を成長させてくれた「現代社会」に感謝するとともに、「公共」が生徒の育成に大きな役割を果たすことを期待したい。

おわりに

～ 公民科を教えることにプライドを持って ～

この言葉を、すべての公民科教育に携わる人に送りたい。

第1節では、私の拙い地歴公民科教員としての経験を述べさせていただいた。振り返れば、もう少し生徒に考えさせ、行動させる授業ができなかったか、内容的にもっと「学問の香り」がするものにできなかったか、現在の心境を正直に述べさせていただいた。読んでくれた方に少しでも参考にしてもらえれば幸いである。

現在、98%以上の中学生が進学する初等中等教育最後の教育の場が高校である。さらに高等教育機関へ進む生徒、就職する生徒等、進路は様々だが、いずれは一人の人間として自立していくことが期待される。公民科の授業を通じて、多様で先行き不透明な時代を乗り切る一国民、一社会人としての素養を培っていくことが大切である。

また、選挙権年齢の引き下げにより、18歳は選挙制度上は「大人」、16・17歳は「TAKE OFF」に向けた重要な年代である。生徒にとって政治や社会が一層身近なものとなってくる。そして、公民科の授業をとおして身近なものにしなければならない。公民科教員の責務は重く、一方でこれほどやりがいを感じられることがあろうか。

新学習指導要領では、公民科の存在意義が再確認されることとなる。今後もすべての教育現場において公民科の授業が有意義に展開され、より鮮明になった生きる力の育成に貢献することを切望する。そして、生徒のみならず、公民科教員も授業を通じて成長することを祈念したい。

【文献一覧】

- 『中等社会諸教科教育法特別改訂版』 森 秀夫・山口 幸男 著 2006 学芸図書株式会社
新版『社会・地歴・公民科教育法』 編著 臼井 嘉一 柴田 義松 2009 学文社
教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（第4回） 配付資料
2017 文部科学省
高等学校公民科用文部科学省検定済教科書 『現代社会』2016 東京書籍
文部科学省『高等学校学習指導要領』 2009
文部科学省『高等学校学習指導要領解説公民編』 2009
『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』 中央教育審議会
2011
『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な
方策等について（答申）』 中央教育審議会 2016

（2017.8.10 受稿，2017.9.20 受理）

〔抄 録〕

公民科は、「生きる力」の育成に大きく貢献するものである。そして、生徒にとって、有意義な時間にシなくてはならない。新学習指導要領では、公民科の存在感が増していくと考える。

本稿では、まず高等学校の社会科→地歴公民科の教師として歩んできた私の拙い活動の一端を紹介させていただいた。学習指導要領の変遷を踏まえながら、その時々で立場で、生徒にとって少しでも良いものという意識で取り組んできた。永遠のテーマである「良い授業とは」にも言及した。

次に「生きる力」の一つの柱である「確かな学力」の育成と公民科の関連を述べさせていただいた。

さらに大学における公民科教育に係る講義の一部を紹介させていただいた。実践的な指導例、学習指導案の書き方、公民科教員に求められる資質等を取り上げた。

最後に2017年度中に公示予定の新学習指導要領に向けて、若干の所感を述べさせていただいた。地歴公民科全体の科目の再編成、とりわけ「公共」の登場は、公民科全体を活気づけるものと考えます。

「公民科を教えることにプライドを持って」、この言葉を、すべての公民科教育に携わる人・公民科教員を目指す人に送りたい。